

第 63 回国際理解・国際協力のための全国中学生作文コンテスト東京都大会 特賞

広尾学園中学 1 年

恩田 美

課題②

「核兵器のない世界」に向けて国際社会ができることは何か。

副題

日本と南アフリカから学ぶ

八月のある日、広島平和記念資料館の入場を待つ行列に並んでいた私を驚かせたのは、外国人の数の多さだった。聞こえてくるのは英語、中国語、フランス語に、聞いたこともない言語まで。炎天下に世界中から広島を訪れる人がいることに心を動かされた。

これはもちろん、五月に広島で開かれた G7 サミットがもたらした効果だろう。岸田文雄首相が核軍縮をサミットの重要テーマであると言明し、各国のリーダーが資料館を訪れたことが世界中に伝えられたことで、人類史上初めて原爆による被害を受け、そこから見事に復興した広島に世界中の注目が集まったことは間違いない。

私は、この広島サミットの成功例に、国際社会が核兵器のない世界の実現に向けてできることのヒントがあると考えます。すなわち、世界唯一の被爆国として、一瞬で何万人もの命を奪った爆発の威力や長く続いた放射線による影響など原爆の悲惨さを世界に向けて訴え続けること、そして国際社会がそれを、フランスのマクロン大統領が資料館で記帳したように「感情と共感の念をもって」受け止めて、核軍縮と平和の実現に向けて行動することが重要だと私は考える。

一時間ほど並んでやっと入場できた資料館では、日本人も外国人も、手で顔を覆ったり、涙ぐんだりしながら展示に見入っていた。私も同年代の被害者の魂の叫びの前ではしばらく動けないほどの感情に押しつぶされそうになった。資料館を訪れて被爆体験に触れる経験をした人にとって原爆の悲惨さはもはや他人事ではなく、より真剣に核兵器のない世界の実現のために何をしたら良いか考えるようになるはずだ。まずは国際社会が広島と長崎で起きたことを知ることが核兵器廃絶の第一歩となる。今年の夏、広島で私は多くの人々がその第一歩を踏み出している姿を見て、希望を感じている。

広島サミットをきっかけに、私の第一歩として九月にある学校の文化祭で発表するテーマを核軍縮に決めた。どうしたら核開発を止められるか、保有国が核兵器を全面廃棄するにはどうすればいいのか調べていくうちに、南アフリカが世界で唯一、自国で開発した核兵器を自主的に放棄した国であることを知った。

私は小学校入学前の四年間を南アフリカのヨハネスブルグで過ごした。当時五歳だった私と同じぐらいの子どもが路上で物を売ったり物乞いをしている姿が忘れられず、私は将来、国際機関でア

フリカから紛争や貧困をなくす活動をしたいと心に決めている。私を含めて先進国の多くの人々が、アフリカを支援が必要な国々、あるいは政治が腐敗した国々として見ているのではないかと思う。

しかし、南アフリカが核兵器廃絶の分野において世界のリーダーであることを知って、私は驚いた。国際社会はこのことにもっと注目して、南アフリカの核廃棄の事例をよく研究し、学ぶべきではないか。そして、南アフリカがもっと発言力を持って国際社会をリードできるよう、国連などの国際機関がサポートすべきだ。マクロン大統領が書いた「感情と共感の念」のほかに、他者の良いところや先進的な事例から学ぶ謙虚さを持てると良いと思う。

昨年、核保有国であるロシアがウクライナに侵攻するなど、核兵器を取り巻く世界情勢は変化し続けている。今すぐに世界中から核兵器をなくすことが難しいことは、中学生の私にも分かっている。それでも国際社会の一員である私たち一人一人が、過去や他者から学ぶ姿勢を持ち、自分たちの経験や平和への思いを発信し続けることで、核兵器のない世界に一步步近づけると信じている。